



日本歯科大学新潟病院

IVY NEWS LETTER

Vol.39
2019.5.1

～地域歯科診療支援病院と地域医療の融合を目指して～

科長に就任して

新潟病院
口腔外科
戸谷 収二



本年4月1日付けで新潟病院口腔外科の科長を拝命いたしました。

口腔外科では口唇口蓋裂、顎変形症、炎症、外傷、口腔粘膜疾患、顎骨の良性腫瘍や嚢胞、唾液腺疾患、神経疾患、埋伏歯、口腔悪性腫瘍などあらゆる口腔外科疾患に対して幅広く治療を行っています。その他、口のかわき治療外来、歯科アレルギー治療外来、顎のかたち・咬みあわせ外来等の特殊外来の中核診療室として、シェーグレン症候群や金属アレルギー、顎変形症の治療をアグレッシブに行っています。

また、当科では口腔癌の治療として、超選択的動注法を用いた化学放射線療法を治療体系に取り入れていて、多くの口腔癌患者さんが治療を受けています。

昨今、質の高い医療を実践していく一方で、安全面を考慮することは極めて重要です。超高齢化社会の進行に伴い、様々な全身疾患に配慮した治療が重要となってきますので、他の医療機関との連携して安全な医療を提供できるよう診療に当たっています。また、社会の知的基盤をなす大学病院に求められる役割として、診療・研究・教育の3本柱が挙げられますが、いずれも極めて重要であり、切り離して考えることはできません。当科は新潟県における口腔外科診療の最後の砦の1つです。私達は常にそのことを念頭に置きながら患者さんに質の高い医療を提供できるように日々の診療に取り組んでいます。そのため、講座教授や所属員と連携して診療や検討会、勉強会を行い、互いの知識や技術の向上に努めるとともに、歯科医師会や協定病院との連携を強化し、地域歯科医療の発展に貢献できればと考えていますので、どうぞよろしくお願い致します。



国内唯一の歯科大学併設の 認知症カフェをオープン

●日本歯科大学新潟病院
訪問歯科口腔ケア科

赤泊 圭太



エヌ・カフェ・アングル
N-Cafe Angle



認知症は、口腔への関心度の低下や食物の認知機能の低下により、口腔衛生状態の悪化、摂食嚥下障害の発現などが懸念されます。また、誤嚥性肺炎をはじめ、口腔環境の変化がもたらす様々な全身疾患との関連性も報告されており、認知症患者の増加は、歯科において深刻な問題です。

わが国の認知症患者数は、2012年時点で462万人、MCI(軽度認知障害)患者は400万人にのぼります。さらに、2025年には700万人に達し、65歳以上の5人に1人

が認知症となる時代が予測されているのです。この数値がどの程度かという、高血圧症患者が約800万人、糖尿病患者が予備軍も併せて約400万人と推計されていますので、認知症患者数は高血圧症や糖尿病の患者数に匹敵し、誰もが遭遇し得る疾患であることを認識する必要があります。

こうした背景から厚生労働省は、2015年に新オレンジプラン(認知症施策推進総合戦略)を策定し、7つの柱となる施策の中の一部に「認知症カフェ」の推進を盛り込み、全国で普及しています。

認知症カフェとは、認知症患者が自分らしさを発揮し、社会との関わりを持って過ごせる憩いの場であり、それを支える家族にとっては、お互いの悩みを共有し、励まし合ったり、専門職からさまざまな情報を得られる場でもあります。さらに、地域住民にも参加して頂くことで、認知症の啓発や正しい理解を得ることに繋がり、地域で認知症患者や家族を支える連携の輪を広げていくことも目的としています。

本学は、以前キャンパス内にあった旧喫茶室を改修し、認知症カフェ「N-Cafe Angle(エヌ・カフェ・アングル)」を新設し、昨年12月9日(日)にオープンしました。カフェの運営は本学学生が中心に行い、他に歯科医師、歯科衛生士、看護師、管理栄養士などがサポート



に加わっています。初回は、「今年一年のふり振り返り」をテーマに書道を行ったり、お菓子作りが得意という男性参加者は、パンケーキを焼いて参加者全員にふるまう場面も見られ、終始和やかな雰囲気で行進しました。初回以降も、毎回異なるイベントを企画しており、折り紙や工作といった手先を使うイベントのほかにも、本学ならではのイベントとして、口腔機能低下症の検査で使用する機器を用いて、「お口の健康チェック」や口腔健康管理をテーマにしたミニレクチャー、「健口体操」なども取り入れ、参加者に口腔健康管理の重要性を認識してもらう機会も設けました。一方で、参加された方の中には、自身の親が認知症により摂食嚥下障害を来し、専門職の知見を求めて参加したという方もおり、こうした相談に対しては、学生だけでなく歯科医師や管理栄養士と一緒に相談に乗り、口腔健康管理や食支援に関する助言を行う場面もありました。



認知症を地域で支えるには、その家族や地域住民の協力はもとより、われわれ歯科医師が認知症を正しく理解し、認知症患者への対応力向上を図ることも重要です。本学は教育機関として、学生に対する認知症教育も重要と考えており、全学年に対し認知症サポーター養成講座を開催し、オレンジリングを配布しました。特に、近年は核家族化が進み、高齢者との同居経験を持つ学生が減少傾向にあり、実際の認知症高齢者との接点は、病院実習に限定されているのが現状です。認知症の病態や患者の心理状態の把握は、座学だけで学習できるものではなく、認知症患者に接してこそ得られる学びが大きいと思われます。さらに、患者家族や多職種とも交流することで、患者を支えている家族の思いを知り、地域で活躍する他職種の業務内容の理解にも繋がることから、カフェへの学生参加は教育においても有益だと感じています。

地域包括ケアシステムにおいて歯科は、単に齲蝕や歯周病などの歯性疾患への対応だけでなく、摂食嚥下機能を含む口腔機能管理、口腔ケア、口腔リハビリテーションの分野において他

職種からの期待が高まっています。今後もエヌ・カフェ・アングルでは、認知症患者が安心して参加でき、楽しいひと時を過ごせる場を提供するとともに、地域住民に対しては、認知症の啓発と口腔健康管理、食支援に関する相談や情報発信の場として活用していきたいと考えています。



●エヌ・カフェ・アングルお問い合わせ

連絡先 ☎025-211-8228
(平日9:00～17:00)



オーラルスキャナーの臨床応用

● 口腔インプラント科

瀬戸 宗嗣



● 図1

現在、医療現場に限らず様々な分野でデジタル化が進んでいます。特に歯科では、従来歯科技工士により手作業で製作された補綴物(歯の被せ物)がコンピューターによって設計から製作までできる時代となってきています。しかしそれらを製作するための最初の模型作りは、印象材と呼ばれるシリコン等の材料とトレーを使用し歯科医師の手で行われる、いわゆるアナ

ログな方法でした。そのため、術者のテクニカルエラーや、材料の変形などの影響を受けやすいものでした。近年この方法に取って代わる新しい技術のオーラルスキャナー(図1)が世界的に普及し始めています。

従来の型取りでは、トレーに印象材を盛り付け歯列に接触させる方法をとります。そのため印象材が接触することにより生じる気泡や、印象材の変形など患部の形状に影響を及ぼすこともあったため、失敗による再印象の可能性もありました。また最近ではスタンダードブリコーションの考えから、患者の唾液や血液に直接接触することによる汚染の問題などの懸念されていました。その点、オーラルスキャナーは非接触のため患部に影響を与えることなく自然のままスキャンすることが可能となりました。スキャン画像は連動するコンピューターの画面に映し出され、リアルタイムで状況を把握できます(図2、3)。うまくスキャンできて



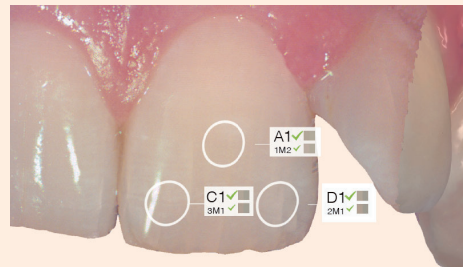
● 図2



● 図3

いない場合や、削り足りない所なども把握でき、調整後再度取り直しも可能です。また歯の色調も同時に再現することが可能となり、歯の色合わせのエラーも少なくなります(図4)。従来の印象材では嘔吐反射があるような患者にも適用できる場合が多く、治療の選択肢も広がることが予測されます。院内で撮影されたデータを使用しコンピューター上に模型を製作することが可能で、補綴物のデザインも行うことができ、クリック一つで技工所にデータを転送することも可能です(図5)。輸送にかかる時間の短縮も大きなメリットとなります。

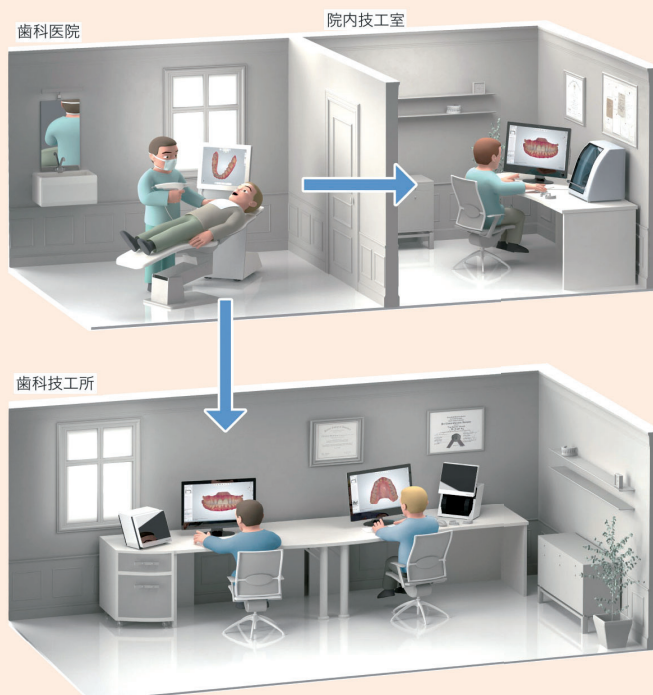
しかし改善しなければならない課題もまだあります。スキャナー自体の金額が高額であることから、日本ではまだ普及していないのが現状です。歯肉など軟組織の再現性や両側に及



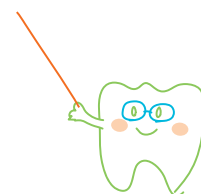
● 図4

ぶ大きな補綴装置などの場合、まだ精度に課題が残る部分もありますが、通常の補綴物であれば従来法と比較しても精度が優れる報告も多数あり、今後さらなる発展が期待されます。

日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科ではこのシステムを導入しました。今後症例を増やし、患者のQOLを向上できるように治療の幅を増やしていければと考えています。



● 図5





新潟病院 主な診療スタッフ

＜病院長＞ 山口 晃 ＜副院長＞ 黒川 裕臣、寺田 真人

●診療科	●科 長	●医 長	●特殊外来	●特殊外来医長
総 合 診 療 科	海老原 隆	菅原 佳広 關 秀明	白 い 歯 外 来	海老原 隆
口 腔 外 科	戸谷 収二	小根山隆浩	ス ポ ー ツ 歯 科 外 来	渥美陽二郎
歯科麻酔・全身管理科	大橋 誠	—	いき息さわやか外来	高塩 智子
小 児 歯 科	三瓶 伸也	—	あごの関節・歯ざしり外来	永田 和裕
矯 正 歯 科	小林 義樹	—	口のかわき治療外来	戸谷 収二
放 射 線 科	小椋 一朗	—	歯科アレルギー治療外来	二宮 一智
訪問歯科口腔ケア科	白野 美和	—	歯科鎮静リラックス外来	大橋 誠
口腔インプラント科	廣安 一彦	—	顎のかたち・咬み合わせ外来	水谷 太尊
			M R O N J 外 来	小林英三郎
			歯の細胞バンク外来	佐藤 英明
●センター	●センター長			●室 長
障害児・者歯科センター	三瓶 伸也			地域歯科医療支援室
睡 眠 歯 科 セ ン タ ー	河野 正己			戸谷 収二
口腔ケア機能管理センター	江面 晃			

■ 電話・FAXによる紹介患者事前予約のお願い

日頃より本院の地域歯科医療連携業務につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本院では患者様の待ち時間短縮と患者サービス向上を目的とし、FAXによる事前予約システムを導入しております。近年、おかげさまで外来患者数が増加傾向となっており、事前予約のない新患者様の待ち時間が長くなることがあり、ご迷惑をおかけしています。

紹介患者様の待ち時間を短縮した円滑な診療を目的に、是非ともFAXによる事前予約をご利用くださいますようお願い申し上げます。なお、放射線画像検査予約以外は患者様からの直接電話予約も受け付けております。(該当の診療科受付にお電話ください。)

また、口腔外科に抜歯および外科処置目的でご紹介いただいた場合、原則として即日抜歯・即日外科処置は施行しておりません。(緊急時はこの限りではありません。)初診日は、診査・診断となりますので、あわせてご理解、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

編集
後記

■ 四月一日の新元号の発表、いよいよ令和元年に突入ですね。この新元号になる事をきっかけとして、美しい日本語や美しい文化や生活の営み、四季の変遷も理解したいものです。新時代の幕開けで、新たにいろいろチャレンジしてみるのもいいですね。(靖)



日本歯科大学新潟病院

IVY NEWS LETTER



発行日／令和元年5月1日 発行人／山口 晃
〒951-8580 新潟県新潟市中央区浜浦町1-8
TEL 025-267-1500(代) FAX 025-267-1546(支援室直通)